

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 塚田 月美

論 文 題 目

職場における転倒労働災害のリスク評価に関する調査研究
(Risk Assessment of Fall-Related Occupational Accidents
in the Workplace)

論文審査担当者

主 査	名古屋大学教授	梶田 悦子
	名古屋大学教授	山内 豊明
	名古屋大学教授	榊原 久孝

論文審査の結果の要旨

人口の高齢化に伴い、労働災害の死傷者数は、以前は機械などによる「はさまれ・まき込まれ事故」が主であったが、2005年からは床面での「転倒事故」がトップとなっている。厚生労働省では「高年齢労働者の身体的特性の変化による災害リスク低減推進事業に係る調査研究」（2010年）が行われ、「職場の転倒等災害リスク評価セルフチェック（身体機能計測と質問票）」が提案された。しかし現場のニーズに応えられるほどの内容に達しているとは言えないとの意見があり、職場での効果的な転倒リスク評価の在り方が課題となっている。一方、一般高齢者を対象にした転倒リスク評価法として、2005年に鳥羽らが「転倒スコア」質問票を開発しその有効性を報告している。そこで、「転倒スコア」質問票を用いて、「職場の転倒等リスク評価セルフチェック（身体機能計測と質問票）」とともに調査し（baseline調査）、1年後にその後の転倒発生の有無を調査し、この転倒発生の有無に対するこれら調査法の有効性を検討した。同時に、職場内での具体的な転倒状況についても調査した。

本研究の新知見と意義は要約すると以下のとおりである。

1. 調査の1年間に、対象労働者436名のうち62名（14.2%）に新たな転倒発生がみられた。その転倒発生の有無と有意な関連が示されたのは、baseline調査時の「転倒スコア」質問票の質問項目「過去1年間で、転んだことがある」（オッズ比：5.0；95%信頼区間：2.5-9.7）のみであった。また「過去1年間で、職場で仕事中に転んだことがある」（オッズ比：9.2；95%信頼区間：1.4-62.6）においても関連がみられた。一方、「職場の転倒等災害リスク評価セルフチェック」の身体機能計測および質問票では、その後の転倒発生の有無と関連を示す項目は見られなかった。
2. Baseline調査時の「転倒スコア」質問票で「過去1年間で、転んだことがある」と答えたものは、「つまずくことがある」（オッズ比：4.0；95%信頼区間：1.6-9.9）とも関連がみられ、転倒既往者では下肢筋力の低下が示唆された。
3. 職場内での転倒は、「階段での転倒」が約70%と多く、次いで「製造現場でパレットに足を引っかけて」であった。職場内での転倒予防策として、製造現場での整理整頓のみでなく、一般的な階段における手すりやすべり止めなどの対策の重要性が示された。

本研究では、特に過去1年間の転倒経験の有無が、その後の転倒に対するきわめて強い予知因子であることを明らかにした。こうした職場での転倒調査は初めてであり、

一般高齢者対象に開発された「転倒スコア」調査票を活用し「転倒の既往」を把握することは、労働現場において転倒リスク評価のために簡易で有用なことを示し、今後の職場での転倒リスク評価に対する重要な知見を提示した。また、職場での転倒が階段で多く発生していることを明らかにし、対策の重要性を示した。

以上の理由により、本研究は博士（看護学）の学位を授与するために相応しい価値を有するものと評価した。